



フィグ・ヤーパン通信

第14号

FIGU-JAPAN BERICHT, Nr.14

発行日 2003年4月1日

発行 フィグ・ヤーパン <http://jp.figu.org/>

『FIGU特別公報』が発刊されました

全国各地から桜の開花便りが寄せられ、春本番を迎えた4月、日本の新年度が始まりました。街中には真新しい背広や洋服を身にまとった若者の姿がまぶしいくらいに目に入ります。しかし今年の春は、イラクでの戦争開戦の知らせが、アメリカ軍の従軍記者による生々しいテレビ映像とともに全国隅々の家庭に至るまで流され、暗い影を落としています。

FIGUは、本来は政治的に中立を保つことを方針としておりますが、この問題に関しては、戦争という手段が決して問題の解決策にならないことを伝え、戦争に対してははっきりと反対の立場を表明しています。このため、アメリカ、イギリスが戦争を挑発し、この問題が国連安全保障理事会で審議されようとしていた2003年1月1日に『FIGU特別公報』を創刊し、全世界の国連組織や国家機関、そして市民に対して、インターネットやEメール等を用いて、FIGUの主張を伝えてきました。フィグ・ヤーパンでも、緊急性の高い課題として、特にビリーによって執筆された文章を抜粋して「速報版」を作成し、日本国内における配布活動を行ってきました。ビリーは『特別公報第1号』で、次のように述べています。

『人は真の人間としていかなる戦争をも妨げ、決して戦争を煽^{あお}ってはならない。それゆえ人類は狂気の支配者と、無定見で無責任な戦争挑発者に対して、またすべての国の彼らの追従者に対して立ち上がり、第二のイラク戦争もしくは湾岸戦争に関するアメリカの恐るべき狂気を食い止めなければなら

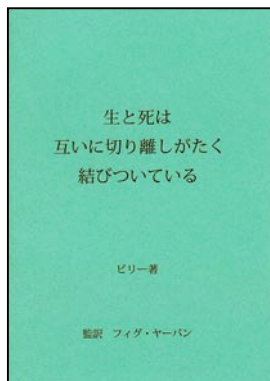
い。そして、イスラエルとパレスチナとの間のこれ以上の対立激化やその他の戦争、さらには第三次世界大戦を阻止しなければならない。古い預言に従えば、どのような形であれ、アメリカとその同盟国の戦争挑発が現実のものとなり、それによって死と殺戮、破壊と絶滅が生じるようなことになれば、第三次世界大戦の恐れは十分ある。人類は一つの国民のように一致団結して、無責任で、誇大妄想で、戦争挑発的な策謀と、切迫している新たな湾岸戦争と、アメリカが世界中で行っている、純然たるテロにも等しい戦争の策謀に立ち向かわなければならない。』(『FIGU特別公報第1号』2003年1月1日発行)

しかしながら、事態はついに、3月20日開戦となり、日本の小泉首相も日米同盟や北朝鮮からの脅威を背景として、日本の国益を理由に戦争を支持する考えを表明しています。こうしたことから、政治家を含め、現代人のほとんどが、古くから伝わる格言や預言に関する知識をほとんど持ち合わせていないことが伺われます。

『FIGU特別公報』は、これまでに第4号まで発刊されています(4月1日現在)。フィグ・ヤーパンでは、第2号について、国会議員や報道機関およそ1000件に対して、冊子の配布やEメール、インターネットを用いた広報活動を継続して実施中です。今後とも読者の皆様のご理解、ご支援をいただけますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

『FIGU特別公報』速報版のインターネットアドレス
<http://jp.figu.org/fsb/fsb.htm>

新刊 『生と死は互いに切り離しがたく 結びついている』



ドイツ語原文対訳
A6判
20ページ

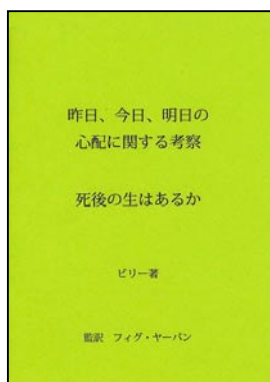
この作品でビリーは「死」の真の意味を理解することによってのみ「生」の真の意味が明らかになるという「生」と「死」の本質的な問題について述べています。身近な関心事でありながら、日常的な話題に上ることが少ない生と死をめぐるテーマについて、重要な知識が散りばめられています。

A6判ドイツ語原文対訳でご覧いただける小冊子として発行しています。

『生と死は互いに切り離しがたく結びついている』

生が死に属しているように、死もまた生に属している。両者は、目覚めと眠りのように互いに依存し、他方なしには存在できない。そして人間にとって逃れようもなく眠りがやってくるように、死もまた人間が望むと望まざるとに関わらず、人生の終わりに現れる。だが人間は生きている間、これについてほとんど、あるいは全く思いを致さない。いわんや、死と関わり合おうとする感情が生じ得るなどとは思ってもよらないのである。これについて考えを巡らせることは、意識から完全に放逐されている。だが、それについて徹底的に考えたほうが、死の本当の意味を理解するために良いであろう。なぜなら、そうすることによってのみ生の意味も明らかになるであろうから。しかし思考や感情は決してそうするようになっていない。……

新刊 『昨日、今日、明日の心配に関する考察 死後の生はあるのか』



ドイツ語原文対訳
A6判
12ページ

この小冊子は、「昨日、今日、明日の心配に関する考察」と「死後の生はあるのか」という二つの作品から構成されています。ビリーは、常日頃の心の重荷にとらわれず、否定的な事柄をできるだけ早く理性的かつ論理的に克服するために、人間は何をすべきかを指し示してくれます。

A6判ドイツ語原文対訳でご覧いただける小冊子として発行しています。

『昨日、今日、明日の心配に関する考察』

地球の1年は365日であるが、それらの日々は人間に喜ばしいことも、苦しいことももたらし、人間は意気揚々と歩むかと思うと、次の瞬間には再び頭をうなだれる。そして人間には不安や恐れ、懸念や心配、さらには苦痛や懷疑から免れて日常生活を送ることは許されていない。だが、1年が過ぎるほどに、多くの日々が生まれては過去に消え失せ、そして人間の力の及ばない彼方に行ってしまう。……

『死後の生はあるのか』

死後の生はあるのか、それも輪廻という形で存在するのかという問いは、最初に認識できるよりも重大な局面をそれ自身の内に宿している。というのは、ある人間が死後の生の存在を確信できるか否かという一事が、その人間の人生観を決定するからである。……

Q&A

質問と回答

□読者の質問

『宇宙の深遠より』および他の幾つかの印刷物で、徹底した菜食に対して警告がなされています。なぜならば、動物製品を断つと、すでに子供や若者のときから人間に悪い影響を及ぼすことになるからです。ところでこれはビーガンの菜食、すなわち一切の動物性物質を摂らない菜食か、またはミルク、乳製品、卵などを十分摂る現実的なベジタリアンの菜食を意味しているのですか。

N. L. (ドイツ)

□ビリーの回答

ビーガンの菜食もベジタリアンの菜食も両方意味している。というのはいずれの栄養形態も、人間の新陳代謝が十全に、自然に、しかも有益に働き、すべての機能を満たすことのできる栄養規範に適合していないからである。人間の新陳代謝は菜食も肉食もともに活用するように作られているので、それが十分正しく適切に、かつ健康を維持促進するように働くためには、これらすべての物質を必要とするのである。物質代謝、したがってまた栄養に依存している免疫系が健全かつ強力で、真にすべての機能を正しく発揮し遂行できるのも、新陳代謝が適当な栄養によって正しく機能し得る場合に限られる。しかし新陳代謝にいかなる動物性栄養も供給されなければ、それは不可能である。動物性栄養には動物の肉も含む。なぜならば、動物の肉はタンパク質のほかに、人間の物質代謝が正しく働き、また個々の器官および体全体、さらには意識、思考、感情およびまた心理が適切に機能するのに寄与するその他の多くの物質を含んでいるからである。もちろんこうした事実は、すべての菜食主義とビーガン主義の狂信者や熱狂者や知ったかぶり、さらにまた知識をひけらかしたがる科学者などは猛烈に否定するが、だからといって真理を損ねることはできない。それが真理であることは変わらないからである。しかしながら周知のとおり地球人においては理性は希少品である。だから菜食主義やビーガン主義の誤った教えは今後も非常に長く続くであろうし、このような生活



様式の誤りを指摘して明らかにしようとする者はみな失脚させられ、口汚く罵られ、このうえなくばかげた口実や言い回し、「啓蒙的な」言葉や説明を浴びせられるであろう。

もちろん、何らかのアレルギー性症状に苦しみ、そのため健康上の理由から特定の動物性タンパク質しか摂取できない人間や、動物性タンパク質を全く摂取できない人間もいる。化粧品を皮膚に塗ったり、動物性成分をベースにした薬を飲んだりするとアレルギー反応が生じるケースもこれに含まれる。こうした症状に悩む人間には、異なる食事や生活の規則が適用されることは言うまでもない。なぜならば、その新陳代謝および免疫系などは、何らかの遺伝性、その他の障害や変質によって正常な機能をどこか妨げられていて、動物性物質からなる食物を摂取すると、まさにアレルギーや疾患が現れるからである。

(『FIGU公報第41号』より抜粋)

「質問と回答」のコーナーでは、読者の皆様から寄せられた質問に対して、ビリーが回答した記事を中心に掲載していく予定です。

パートナーシップ（男女間の協力関係）（2）

エドゥアルト・ビリー・マイヤー

「類は友を呼ぶ」の原理は、調和したパートナーシップを生み出すが、しかしこの原理も、ときどき意見の相違が生じ、ときには激しく口論することを防ぐものではない。しかし、たとえ争いが生じたとしても、これは崩壊や、相手に対する軽視および

無礼を意味するものではない。なぜならば、そのような争いのゆえに互いの関係や結びつき、さらに愛は新鮮かつ誠実であり続け、憎悪や嫉妬も、復讐や侮蔑や報復の考えも現れることはないのである。これは、カップルが「両極は互いに引き合う」という趣旨や、金銭、能力、美貌、性生活、職業、社会的名声または相手の偶像化などと言った、取るに足らない理由で一緒になる場合と全く逆である。「類は友を呼ぶ」の原理に従って一緒になったカップルは、通常は敵意や悪意を抱いて争うことはなく、建設的な形で争う。つまり、事柄や対象そのものについて争い、あるいは意見の相違などを徹底的に論議するのである。不信任、不誠実、根拠のない疑念、非難、その他の攻撃などはタブーであって、パートナーシップの良い関係と結びつきに入り込む余地はほとんどない。また敵意を抱いたり、疲労困憊していることを口実にしたり、逆上したりすることもない。良好で誠実なパートナーシップは、決定的な相互信頼、つまり信頼し合っていること、いろいろな事柄や要件ではほぼ同じであること、誠実さ、互いに対する真の好意と愛、互いに対する何らかの興味と喜び、相互の協調性、調和と自由、そして互いに対する良好で健全な感情移入能力などに基づいて構成される。しかしこうしたすべてのことが実際に生まれて充足され得るのは、古くから伝わる諺であり原理でもある「類は友を呼ぶ」に完全に従い、多くの事柄や関係で共通点のある人間が一緒になる場合のみである。これとは逆に対立する者たちは、事柄や対象のことで争ったり、意見の違いを徹底的に議論したりすることなく、互いの攻撃から始め、名誉や人格、性格や意見などを攻撃し、傷つけ、侮辱し合う。誠に建設的な争いは、ひとえに事柄や対象に関するものであって、パートナーを貶めたり、傷つけるような形態に関するものではない。というのも、ある人間が他の人間を何らかの仕方で傷つけると、争いの対象も、争いの本来の目標も、そしてまた追求された解決策も失われるからである。さらに個人攻撃や、そこから生まれる侮辱および中傷によって、パートナーは防御の姿勢を取り、それがさらに互いの攻撃や罵りにつながる。その結果、最後には互いに激怒し、相手より上位に立とうとして大声で叫んだりわめいたりして、ますます自制が効かなくなり、

憎悪、嫉妬、復讐、報復、殺人や殺掠、あるいは少なくとも長期にわたる喧嘩や憤激、あるいは別離や離婚に至ることがある。それゆえいかなる場合も争いや意見の相違は、常に事柄か対象に関わり、したがって建設的でなければならず、人格攻撃などを行ってはならない。そうしてのみ侮辱や中傷が生じることはなく、いずれのパートナーも体面を失わないことが保証されるのである。しかしそのように機能し得るためにはいかなる場合も、互いの尊重、尊敬心、そしてパートナー相互間の必要な距離を維持するという主要な規則が守られなければならない。まさにこの3つの価値は、良好で誠実で、愛情に満ち、幸福で自由で、穏やかな調和の取れた関係と結びつきにとって決定的に重要である。人間が自分自身や自分のパートナーを尊重し、尊敬し、そして互いに必要な距離を保つならば、そのとき人間は正しく、公正で、責任ある振る舞いをする。そしてこれらの価値こそが、健康で進歩的で、それゆえ絶えず拡大して強固になると共に内面化していく関係と結びつきの基本前提なのである。しかしまたこれは、決定は互いを結びつける対話を通して共同で下し、権威および責任を分割すると共に共同で引き受けることをも意味する。したがって良いパートナーシップとは、ビジネス上の良い関係がおよそあり得たかもしれないものをはるかに越えている。良いパートナーの関係は、互いの喜びと義務の形でも、また信頼、愛、平等および同権などに関しても、各々が持続的な作用と相互作用において何かを与え、そしてまた何かを受け取ることを、それ自身のうちに含んでいる。この場合、このギブ・アンド・テイクの間に、そしてまた個人の自由に関しても、常にバランスが取れていることが必要である。が、それが可能なのは、このことに対する必要な理解が全体を貫いている場合のみである。これには愛において、またいつでも現れる事柄において互いを思いやることも含まれる。もしこれらの前提がないならば、パートナーシップは単なるコストパフォーマンスの計算、したがって利害関係以外の何ものでもなく、それは最終的に無に帰して、関係の終焉に至る。

パートナーシップにおけるギブ・アンド・テイクが、常にバランスの要因でなければならぬ。しかしひとたびこのバランスが動揺すると、パートナー

の関係における摩擦、さらには破壊が不可避である。なぜならば、パートナーシップにおいて、何も取ってはならず、ひたすら与えなければならない立場になろうという者はいないからである。この場合、どのように与えるかは問題にならない。妥協することは許されようが、その比率は常にバランスが取れていなければならない。これに関する問題やその他の問題を回避しようとするならば、それにはたった一つの道しかない。それは、いかなる場合もお互いのコミュニケーションと必要な相互理解を通る道である。語り合うこと、すなわちコミュニケーションは、パートナーシップが良好なものであり、またそうあり続けることを願うならば、あらゆるパートナーシップの中心をなす。そしてこれはあらゆる形態の良好で安定したパートナーシップに当てはまる。しかし節度を失い、傷つけ、そして理性的なコミュニケーションに手を貸さない、非建設的で深刻な争いは、さまざまな問題や摩擦、さらには別離、破壊および離婚を招く。

互いに耳を傾け、語り合い、互いに同意することは、何らかの関係や結びつきにおいて極めて重要である。なぜならば、これらの要因はパートナーシップを相互に強化し、思考と感情を自由にし、そして互いに必要な理解が生まれて、男女いずれのパートナーも自分の問題を抱えて孤立しているのではないということ認識させるからである。各々のパートナーが自分の問題を相手と分かち合う。これはパートナーシップにおいて存在し得る最大の肯定的な価値の1つである。相手に何か伝えようと紙片に書きつけた情報でさえも、その内容が重要であろうとなかろうと、大きな意味を持っている。なぜならば、そのような行為は連帯性の観念も、そしてそこから生じる同種性の感情、さらにはこれに関する心の躍動をも促すからである。このような行為はまた、親近性、親密性および専有性、そして口頭でのコミュニケーションを成立させる。この場合、専有性は、互いに結び合ったこの2人の人間だけが、まさにその共存と連帯においてそうした行為をなしていることを示唆する。それによって強さと、本当の連帯性が成立しているという確信が生まれるのである。しかしこのための根本前提は、互いにパートナーが何を欲しているか知ることである。しかしこれは、良

いパートナーシップにおいて2人共、相手がどんな不安、恐怖、嗜好および喜びなどを持っているかを正確に知らなければならないということの意味する。パートナーについて正確に知ることを要求するのは敬意と尊敬心のみである。さらに極めて重要なのは、共通点が存在し、構築され、そして遂行されることである。それらの共通点は双方のパートナーにとって好都合であれば、どのような形のもので良く、またいかなる制限も受けない。このような共通点によって信頼と連帯性の感情、そして必要な互いの親近性が生み出される。しかしこの親近性においては、互いを敬愛する健全な距離が保たれており、いずれのパートナーも相手に近づきすぎて、意識するとしないとに関わらず相手を傷つけたり、押しつけたりすることはない。同じく重要なのは、いずれのパートナーも備えていなければならない心の余裕である。というのは、パートナーシップの枠内であっても自由がなければならず、不信任、悪意、嫉妬心、猜疑心、不安感などが現れて自由闊達さを妨げたり、制限したりしてはならないからである。実際、良好にして堅固で安定した持続的な関係と結びつきもしくはパートナーシップは、それぞれ相手に必要な自由を認めるものであり、嫉妬心や不信任に駆られて質問や調査などをやって、相手に難癖をつけてはならない。誠実には誠実を、信頼には信頼を、忠実には忠実を、が原則である。

一緒に同じことについて語り、共に泣き、悲しみ、または笑えること、それがあらゆるパートナーシップにおける関係の絆を強くする。良いパートナーの関係においては、互いの面白いがる気持ちや、性生活に関する充足と喜びも必要である。しかし性生活において手管や頻度などの点で決して相手に過度な要求をしてはならない。さもないと亀裂が生じ、そこから不愉快な衝突やもっと悪い事態に発展しかねない。それゆえ性生活は過度に求めることも、軽視することも許されず、あるいは習慣やルーチンワークにされてはならず、また常軌を逸して嫌悪を生むような手管に墮落してはならない。パートナー間の健全な性生活で大切なのは、これに関してパートナーがそれぞれ自分の適切な願望を表明し、また考慮して、何らかの形で互いに相手を不安にしたり、傷つけたりしないことである。こうして恋愛生活および

これと結びついたコミュニケーションがうまくいくならば、愛と喜びと幸福感が保証される。だが、性生活が単なるルーチンワーク、快楽、さらにはビジネスや強要行為に変質すると、いろいろな問題や不愉快なこと、憎しみや怒り、嫌悪の念などが生じることは避けられない。良好にして堅固で安定して機能するすべての関係にとって、セックスは極めて有意義で重要であるが、それは願望に応じて遂行される限りにおいてである。セックスの演出はパートナーシップの演出と同じく重要である。セックスにおいていつも自分を抑制せず、食欲で、粗野で、変態的であるならば、長い間にはエロティックでなくなるだけでなく、やがて嫌悪と吐き気を催させる。それゆえ恋愛生活においてはパートナーとの肉体的な結びつきとともに、思考および感情の結びつきも創り出すために、適当な抑制を行わなければならない。相手にいつも最良の面だけ見せるというのは、人間にとってそれほど容易なことではないであろう。無関心であるのも、最終的にはあらゆる関係を壊してしまうから適切ではないが、単なる性の営みはいかなる結合的な関係も成長させることはない。

良好、堅固で安定した持続的なパートナーシップにあって繰り返し考慮、熟考しなければならないのは、相手の側に立つことであり、これは関係や結びつきにおいて非常に重要な意味を持つ。したがってパートナーシップが常に引き続き協調的で肯定的に推移し、その結びつきの価値が絶えず拡大するようにパートナーシップを構築すべく相応の努力を払わなければならない。これは関係と結びつきを維持し、絶えず手を加え、改善し、成長させていくために、すべてのパートナーが繰り返し根本的に認識しなければならない、もう1つの重要なポイントである。そしてまさにこれは地球の人間にとって容易ではなく、それを悟性と理性および経験と体験によって、さらに理解と意欲によって自ら体得しなければならないのである。そして人間はそうする場合のみ、人生とパートナーの基盤を獲得することができ、そこからパートナーシップによる愛と幸福、平和と調和が生じ、さらにそこから生まれるすべての価値が帰結するのである。

(おわり)

*パートナーシップ（男女間の協力関係）は、A5判の小冊子として発行されたビリーによる作品を全訳したものです。近日中にドイツ語対訳版として、出版・販売する予定です。

フィグ・ヤープンからのお知らせ

□第7回全国読者集会在開催されました□

平成15年度第7回全国読者集会は2月2日、神奈川県川崎市で開催され、盛況のうちに無事終了いたしました。

今回の講演会は、4年前（1998年）のギドー講演会以来の過去最多の読者の方々が参加されました。インターネットの普及にともなってホームページで読者集会の案内をご覧いただいたり、読者の方々と友人、知人でお誘いあわせてお越しになった方など今まで見られなかった傾向がありました。

7回目を迎えた今回の読者集会は、昨年平成14年6月9日に作業準備が開始されました。毎月作業を進め、その中で読者集会の形態や日時が決定されていきました。準備期間に約8カ月を要し、フィグ・ヤープン通信を介して日程やプログラムが告知され、去る平成15年2月2日開催となりました。

今回はこれまでの読者集会とはスタイルも趣旨も変え、新しい構想のもとで開催することとなりました。読者の皆様からのご講演や、特別講演者として日本でビリー・マイヤー事件を初めてテレビ放映したディレクターの方を迎えての講演は、これまでの読者集会になかったもので、新風を吹き込む形になりました。

午前中のビリー・マイヤーとの出会いをテーマとした読者による講演では、各講演者から興味深いお話を伺うことができました。日本にビリーのコンタクト記録を翻訳紹介した当時の状況についてOHPを使つての報告がありました。別の講演では、日本人として初めて直接スイスのビリーを訪問し、その後日本に紹介した経緯など、私たちにとても初めて知る当時の事情が語られました。また東京スターグループの紹介、音楽と創造の調和、ヨーロッパと日本の間の感性と常識の違いなど、貴重な体験の報告がありました。読者による講演が終わり、

最後に参加者全員での記念写真撮影を行い、午前の部が終了しました。

午後の部は予定どおりフィグ・ヤーパンの活動報告で始まりました。会計報告、出版計画、事務所の開設、フィグ・ヤーパン公式ホームページの紹介などについて報告がありました。

それらの報告が終了次第、矢追純一氏の1980年スイス訪問時のテレビ取材のエピソードや当時の出来事について、約1時間の講演が行われました。矢追氏による特別講演「初めてのテレビ取材」は、多くの読者の注目を集めたのは言うまでもないことでした。矢追氏の講演は多岐にわたり、その内容は出席された読者の方々に興味あることとして記憶に残ったことでしょう。

矢追氏との質疑応答をはさんで、その後約10分間の休憩の後、「ビリー・マイヤーとの出会い」をテーマとして、講演者5名とフロアの参加者全員でパネルディスカッションを行いました。討論も盛り上がり予定終了時間を過ぎてしまいましたが、会場の使用できる時間にも制限がありましたので16時過ぎに無事第7回全国読者集会は終了しました。

□公共図書館への書籍案内および寄贈活動□

フィグ・ヤーパンでは、FIGU関連書籍の普及を目的として、全国の公共図書館を対象として、初めての読者の方々にも興味深くお読みいただける『宇宙の深遠よりー地球外知的生命プレアデスとのコンタクト（徳間書店刊）』を案内する活動を開始しました。この活動は単に書籍を紹介するのみにとどまらず、図書館の費用で書籍購入をしていただくか、

寄贈申し入れをフィグ・ヤーパンにさせていただくことにより、公共図書館へのFIGU書籍導入実現を目標としています。これによって、より多くの方々がFIGU関連書籍に接する機会を持つことができることを期待しております。

公共図書館では、一般的に来館者に対して、購入を希望する書籍の申し込みを受け付けています。この活動に賛同いただける読者の方々は、お近くの図書館にいらした折に、本書が見当たらない場合には、『宇宙の深遠よりー地球外知的生命プレアデスとのコンタクト（徳間書店刊）』購入希望と、図書館にお申し出いただければ幸いです。また、この活動に関連して、図書館書籍寄贈援助金にご協力いただけますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

□『FIGU特別公報』の無償配布活動□

すでに本誌巻頭でお伝えしましたとおり、イラク戦争に関連して2003年1月1日からスイスFIGUで発行されている『FIGU特別公報』を、迅速に日本語に翻訳してお伝えする「速報版」の発行を開始しています。「速報版」は、読者の皆様に無償配布しています。第2号については、読者の皆様をはじめ、日本の主要な報道機関、国会議員等にも範囲を広げ、無償で配布活動を行いました。4月1日現在、第4号まで発刊されていますが、フィグ・ヤーパンでは、スイスFIGUと連携しながら、今後もこの活動を継続して実施していく予定です。これまでにお手伝いいただきました、多くのボランティアスタッフの皆様に感謝いたしますと同時に、今後も読者の皆様のご理解、ご支援をよろしくお願い申し上げます。



出版物のご案内

■宇宙の深遠より 一地球外知的生命プレアデスとのコンタクト (徳間書店刊)

価格 2,940 円 (税込 送料別 550 グラム)
全国の書店でもお求めいただけます。

■フィグ・ヤーパン通信

価格 各 300 円 (税込)

1号 (送料別 45 グラム) 2号 (送料別 225 グラム)
3号 (送料別 55 グラム) 4号 (送料別 70 グラム)
5号 (送料別 65 グラム) 6号 (送料別 40 グラム)
7号 (送料別 60 グラム) 8号 (送料別 70 グラム)
9号 (送料別 55 グラム) 10号 (送料別 85 グラム)

フィグ・ヤーパン通信は 11 号以降無料となりました。

■日本語版 水瓶座時代の声

価格 各 1,000 円 (税込)

83/1 号 (特集) (送料別 140 グラム)
83/2 号 (特集) (送料別 105 グラム)
87/1 号 (特集) (送料別 140 グラム)
91/1 号 (特集) (送料別 135 グラム)

■第 235 回会見

価格 500 円 (税込 送料別 70 グラム)

■日本語版 FIGU 公報

6号 価格 500 円 (税込 送料別 90 グラム)
7号 価格 500 円 (税込 送料別 95 グラム)
29号 価格 500 円 (税込 送料別 155 グラム)
30号 価格 500 円 (税込 送料別 155 グラム)
38号 価格 500 円 (税込 送料別 160 グラム)

■精神と物質の生命

価格 500 円 (税込 送料別 55 グラム)

■昨日、今日、明日の心配に関する考察 新刊!!

価格 100 円 (税込 送料別 15 グラム)

■生と死は互いに切り離しがたく結びついている

価格 100 円 (税込 送料別 25 グラム) 新刊!!

■切なる願い

価格 100 円 (税込 送料別 25 グラム)

■あえて賢くあれ

価格 100 円 (税込 送料別 25 グラム)

■FIGU の原則あるいは人間の原則

価格 300 円 (税込 送料別 40 グラム)

■プレヤール人が地球人に望むこと

価格 200 円 (税込 送料別 30 グラム)

■人口過剰問題配布用冊子

価格 各 100 円 (税込)

人口過剰との闘い (送料別 95 グラム)

拷問と死刑・人口過剰 (送料別 75 グラム)

人口過剰爆弾 (送料別 45 グラム)

□ 書籍のご注文について □

すべての書籍のご注文は、郵便振替にて承っております。ご希望の書籍代金に送料を加えた金額を、お近くの郵便局から下記フィグ・ヤーパンの口座宛にお振込みください。なお、現金書留および切手同封による直接のお申し込みはご遠慮ください。

□ 郵便料金表 □

50 グラムまで 120 円	500 グラムまで 310 円
75 グラムまで 140 円	750 グラムまで 340 円
100 グラムまで 160 円	1000 グラムまで 380 円
150 グラムまで 180 円	1500 グラムまで 450 円
200 グラムまで 210 円	2000 グラムまで 520 円
250 グラムまで 240 円	2500 グラムまで 590 円

□ 振込用紙の記入欄 □

口座番号：00160-4-655758

加入者名：FIGU-JAPAN

(アルファベットで記入して下さい)

金額：送料を含めた合計金額

払込人：あなたの住所、氏名、電話番号

通信欄：購入する書籍名と冊数

フィグ・ヤーパン通信 第 14 号 (無料)

発行日 2003 年 4 月 1 日

発行 フィグ・ヤーパン (FIGU-JAPAN)

住所 〒192-0916

東京都八王子市みなみ野 3-11-2-305

電話 0426 (35) 3741

FAX 0426 (37) 1524

URL <http://jp.figu.org/>

E-mail jp@figu.org

郵便振替 00160-4-655758

加入者名 FIGU-JAPAN

本書の全部または一部を無断で複製複製することは、著作権法上の例外を除き禁じられています。本書からの複製を希望される場合は、フィグ・ヤーパンにご連絡ください。

Copyright (c) 2003 by FIGU-JAPAN. All rights reserved.